

# 胎児性水俣病患者が置かれた社会的環境に関する考察

## －過去のヒアリングデータ分析より－

A Study on the Social Environment of Patients with Fetal-Type Minamata Disease:

An analysis of past interview data

原田 利恵

Rie Harada

『環境社会学研究』第27号, 2021, 160-175頁.

Journal of Environmental Sociology, Vol.27, 2021, pp.160-175.

本稿は、過去に実施された水俣病関係者へのヒアリングのデータの中から、胎児性水俣病患者に関する情報を取り出し、彼らを取りまく社会的環境、医療・介護、社会生活の実態について分析し、本人へのアクセスが可能な3ケースを中心に、補助的資料を用いながら事例研究としてまとめたものである。

考察の結果、医療や福祉、行政サービスが届いていない段階において、患児と家族が親族共同体の中で身体機能の訓練を何年も独自に続けていたことが判明した。次に、患児が専門の医療施設に入院することで心身の飛躍的発達が見られた一方、幼少期に家族と離れたことによる精神的負荷や喪失感が大きかったことも明らかとなった。そして、胎児性患者の特殊な社会的環境としてメディア等に晒され、家族関係に影響を及ぼした可能性について確認された。

長期にわたる入院やメディアへの露出は、本人はもとより家族への負担も大きい。しかし、多様な人が彼らの生活に関わることで、患児と家族の孤立化を防ぎ、患児の社会性の発達や精神面の成熟に寄与し、生活に変化をもたらす側面も示唆された。

胎児性患者たちは生まれる前から心身に大きなダメージを負わされた水俣病事件の「被害者」であるが、彼らの生活史を紐解くと、枕詞のように付きまとう「胎児性」という弱者のイメージを覆すかのように力強く、自立した個人として生きたいと奮闘してきたサバイバーとしての姿が浮かび上がった。

キーワード：胎児性水俣病、社会的環境、生活史、ヒアリングデータ